

実践事例.10

初対面の相手にプレゼンする。  
話し合いから建設的妥協点を探る。  
社会に通用する新しいICT力を育成

大阪私立羽衣学園中学・高校

ICT教育のなかでも重要な  
リアルなコミュニケーション

1923年に女子校として創立、今年度から男女共学に改編した羽衣学園中学・高校。早くからICT教育に力を入れ、授業のなかで電子黒板やPC、タブレット端末などを使ってきた。さらに、企業や国内外の学校などと連携しての授業を実施することで、社会に通用する新しいICT力(プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、情報技術、英語力)を身につけることを目指している。

そんな同校のICT教育を引っっぱっているのが、情報管理室・国際交流室室長の米田謙三先生。情報科、英語科、社会科の教員免許をもち、さまざまな機関と連携をとりながら教科横断型授業やプロジェクト型授業プログラムを開発。校内のみならず、外部機関との合同公開授業やICT関連の講演も数多く行っている。「大学では社会科を学んでいましたが、アジア各国を旅行した際、英語でコミュニケーション

できないために相手に伝わらないということにシヨクを受け、英語の単位もとりました。そんな経験から、教員になった際、とにかくリアルなコミュニケーションを大事にした授業をやつていこうと考えました」。2000年ごろから英語の授業でもテレビ会議を取り入れたり、産学連携に取り組んだり、リアルなコミュニケーションを生徒に経験させるために奔走してきました。同時に、03年の必修化に合わせて情報科の教員の資格も取得し現在に至る。

外部と連携することで  
コミュニケーションの機会を作る

米田先生はこれまでに、ソニーやパナソニック、NTTなどに協力してもらい、情報の授業を実施している。最近ではグリーやミクシイ、LINEなども連携。「情報は特に教員の知識力に限界があり、専門家の助言が欠かせません。ICT関連の研究會などで企業の人と知り合ったら、授業への協力もお願するという流れです」。最近では



情報管理室室長  
国際交流室室長  
米田謙三先生

School Data

1923年創立 / 普通科 / 生徒数735人  
(男子141人・女子594人) / 進路状況  
(2012年度実績) 大学60.4%・短大13.9%  
・専門学校18.7%・就職2.1%・その他4.8%

2年生の情報の授業で、SNSの企業と連携して、新しいアプリの企画を立てるという授業を実施。アプリを作りどうやって利益を上げられるかを考えさせることで、SNSの課金の仕組みも学べる。教員だけではなかなか実現できない授業だ。来てもらうのが無理な場合は、先方とスカイプでつなぎ講義してもらおうこともある。

こういった連携は知識を得るだけでなく、コミュニケーションの機会にもなる。連携の相手は情報関連企業だけではない。一般企業や自治体、他校なども積極的に連携。いづれにしても、どこかひとつつながれば、そこから次へとつながることができる。例えば、最近では文部科学省の委託事業で、島根県の離島である隠岐島の中学校でネット依存をテーマに講演を行った。島の中学生たちの生活スタイルに興味をもった米田先生は、後日、島の中学生と羽衣学園の高校生をスカイプでつないでスマートフォンをテーマに対談させている。リアルなコミュニケーションへのこだわりは教科連携の研究授業でも同様だ。理



中国からの留学生たちと協働して、英語のプレゼンテーション資料を作成中。ちょっとした機会も逃さず、コミュニケーション能力や英語力、プレゼン能力を磨く場にする。



日米同時理科実験。スカイプでつないで、同じ時間に同じ実験を行う。ハイパーミラーという技術を使って、画面上で握手も。

科・情報・英語の合同授業を行った際は、日米同時理科実験プロジェクトと銘打ち、スカイプを通じて、日米の生徒が同じ実験を行い結果を比較し合った。

新しい時代の授業の形を  
凝縮させた「高校生熟議」

さまざまなプロジェクトのなかでも、米田先生がコミュニケーション能力育成に必要だと考えていることをほぼ網羅してい

取材・文 / 永井ミカ

### ■「スマートフォンの活用法 高校生熟議」 in Osaka & Tokyo (2012年)

#### ■目的

- 初対面の人と話し合うという経験を、段階的に「考える、まとめる、話す、見せる、伝える」などの技術を修練する。
- 携帯電話やインターネットを安全に、安心して使うために、高校生として情報モラルについて自ら深く考え、実践することで、将来のよりよいインターネット利用環境の構築の一助とする。

#### ■熟議の流れ

##### ●7月21日 大阪【リアル熟議】

第1部では、スマホに関連する企業(ミクシィ、ディー・エヌ・エーなど)による各10分程度のプレゼンテーション。第2部では、高校生がグループに分かれ「スマホって何?」をテーマに議論と発表を行う。グループは、学年も学校も異なる高校生7~8人と、ファシリテーター、サポーター(専門的な質問に答える人)、書記。第3部で発表する。

##### ●8月26日 アイスブレイクイベント

NTTドコモによる「ケータイ安全教室」の受講と、2020年の情報社会を描いた映像の観賞。NTTラーニングシステムによるプレゼンテーションの手法に関する講演とグループワーク、発表。



##### ●9月8日 東京【リアル熟議】

##### ●9月9日~10月14日 ネット熟議

大阪と東京の参加者が合同でネット熟議を開催。1か月以上の間、「ガラケー派? スマホ派?」をテーマにネット上で意見を述べ合う。サイトは「文部科学省 政策創造エンジン 熟議カフェ」を利用。

- 高校生がネット上で堂々と意見を投稿できるように、事前に議論した点、学生ファシリテーターを設ける(前年度の熟議経験者)/投稿しやすいよう、簡単な質問の投げかけから始める。/PCからしか投稿できないため、環境のない生徒には校内で機会を与える。/授業として多くの時間をとれないため、ファシリテーターや教員が協力して活性化を促す。/最終的にネットの有害性や規制という論点でなく、生徒が将来、夢をもってネットを活用したり、自己の目的達成の手段としたり、国際的な活動に通じるような議論を促したい。/生徒たちが投稿しやすく、大きな視点で議論できるよう促すために、事前にある程度、議論全体のストーリーをファシリテーターと教員が共有する必要がある。

##### ●11月3日 大阪×東京【リアル熟議】

「これからのネットとケータイを考える」をテーマに議論と発表を行う。

第1部では、大阪と東京をテレビ会議でつなぎ学校紹介と質疑応答。第2部・3部では、プレゼンテーションのスライドにまとめ、各グループごとに発表。

##### ●12月15日 高校生熟議サミット

東京と大阪、それぞれ3名の高校生代表が熟議の結果をもちり、最終提言をまとめるための熟議を開催。活発な議論のあと、模造紙にまとめた当日の記録を、プレゼンテーションのスライドにする。役割分担や発表の方法を決め、これまでの熟議から得られた高校生からの提言として発表。

##### ●1月28日 各省庁でのプレゼンテーション

熟議サミットでの提言に基づき、代表者2名が内閣府、総務省、文部科学省でプレゼンテーションを行い、高校生からの提言を行政に伝える。

#### ■主な成果

- 情報リテラシーについて、さまざまなレベルにいる生徒たちが、それぞれの立場から共通の問題点や課題、将来性を検討したことで、新しい気づきを得、今後、その問題について深い思慮が得られるきっかけとなった。
- ネットワークリテラシーを育み、生徒たちが主体的に学ぶ意欲や、問題発見・解決能力を身につけ、また情報機器を活用したコミュニケーション能力を身につけることができた。
- 企業の方の考えや、他校の生徒や先生の意見を聞き、視野を広げたり新しい考えをもつことができるようになった。

「熟議」とは協働を目指した対話のことをいい、文部科学省が「ネット熟議」や「リアル熟議」を推進している。ここで紹介した「高校生熟議」は、大阪私学教育情報化研究会、安心ネットづくり促進協議会、一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構の共催によるもので、2012年度が第2回め。現在、規模を大きくして2013年度の第3回が行われている。詳しくは

<http://www.ema.or.jp/news/nt2012/312.html>

<http://www.nichibun.net/case/ict/50/03.php> など。

るのが、12年に「アメンバー」のひとりとして実施した「スマートフォンの活用法 高校生熟議」(左図)である。6カ月かけて行ったプロジェクトだが、ここには、複数の高校の生徒たちによるリアルな話し合いや、企業による講義、文字を通じたネット上でのやりとりなど、現代のさまざまなコミュニケーションの形態が含まれている。最後には「スマホに対する高校生の提言」を内閣府、総務省、文部科学省でプレゼンテーション。これも、コミュニケーションのひとつの形だ。

「ICTを活用した情報や総合の授業と、クラス内や校内でのプレゼンがゴールになっている場合が多いんです。そこに到達するために生徒はすごく努力をしていますが、もっと先に進める生徒がいるのも事実。今求められている「コミュニケーション能力のひとつに、『自分の知らない相手に対してどう発信するか』『相手によってどうプレゼンスタイルを変えるか』があると思います」と米田先生。「さらに、言わなければならない、建設的妥協点を探る力も育てたい。知らない人たちと初めて出会う、相手

の意見を聞き、自分の意見も言い、意見の相違でぶつかり合ったとしても最後に建設的妥協点を見つけるといふこと。熟議ではそういう機会を作り出せましたし、生徒は課題をクリアできたと思います」。

今後さまざまな連携を通じて、「コミュニケーション」を重視したプロジェクトを発信していきたいという米田先生。「熟議のようなスタイルがもっと広がってほしい。生徒は、情報社会のなかでどんどん変化しています。教員は協力し合い、外部の力も借り、教育を考えていかなくてはと思っています」

#### 実践のヒント

ファシリテーションや事前の準備も必要です

Q いずれ「情報」では通常の講義型の授業は不要になるのでしょうか?

高度情報化社会の中で、情報や情報機器を活用できる人材が求められています。情報はコンピュータの操作だけを教える科目ではなく、講義型授業も必要だと思います。

Q 他校の生徒といきなりコミュニケーションができませんか?

事前準備やファシリテーターは必要です。例えば隠岐島の中学生と対談したときも、事前にお互いの地域について知り、発言する内容をまとめておいたりしています。また、自己紹介や学校紹介など、楽しい話題で打ち解けさせたりもします。

Q コミュニケーションが苦手な生徒に対する指導は?

話すことが苦手な生徒はいますが、話せばいいのではなく、話す中身が重要です。「聞く」というのも大切なスキルのひとつ。苦手でも、その場においてみんなの意見を一生懸命聞けば、何かが残るはず。そして、最後に少し発言ができたというだけでも成長があると思います。